

日口漁業専門家・科学者会議

おおくま かずまさ
大熊 一正（調査研究課主任研究員）

日口漁業合同委員会の合意に基づいて設置されている標記会議が昨年11月5日から14日までの10日間ロシア連邦ウラジオストク市にて開催されました。今回日本側からは独立行政法人水産総合研究センター北海道区水産研究所（北水研）の水戸啓一亜寒帯漁業資源部長を団長に11名が出席し、ロシア側からは太平洋科学調査・漁業センター（チンロセンター）のボチャロフ所長を団長として16名が出席しました。また、全体会議に加え例年どおり「浮魚」と「さけ・ます」の2つの分科会が設置されました。さけ・ます分科会では日本側は北水研の石田国際海洋資源研究官が、ロシア側はカムチャツカ漁業・海洋研究所（カムチャトニロ）のシニャコフ所長がそれぞれチーフをつとめました。

さけ・ます分科会では2001年に実施された共同調査および国内計画に基づく調査結果と両国の研究機関等へ訪問した際の意見交換結果の報告、極東系さけ・ます類の資源状態とその変動傾向についての意見交換、両国における人工再生産の概要説明、および2002年、2003年の科学技術協力計画案の作成などが行われました。

極東系さけ・ます類の資源状態についてロシア側からはカラフトマスの西カムチャツカ系偶数年級群、東カムチャツカ系奇数年級群、及びサハリン・千島系奇数年級群は良好な状態であるが、これら以外はすべての魚種について資源が低迷、あるいは減少していると報告されました。これに対して日本側からはギンザケ、マスノスケについてはやや資源状態が良くないものの極東系さけ・ます類は全体として高い資源水準にあり、近年は良好な状態が続いていると報告しました。

また、日本側から2001年度の日本200海里内さけ・ます漁業の操業報告を行った際、ロシア側はこれら太平洋小型さけます流し網漁業でのべ

ニザケ、ギンザケ、マスノスケの混獲に関する日本側調査結果がロシア側の予想よりもはるかに小さいものであるとしてその内容に疑念を示し、2002年度の科学技術協力計画において、沿岸で漁獲されるさけ・ます類の生物調査を行いたい旨の提案を行いました。

これに対して、相互主義の観点から少なくともロシアがロシア200海里内の沖合で行っている流し網試験操業に関する資料の提出が先決であることから、日本側は協力計画案としてロシア調査船の流し網調査による漁獲物の生物調査を提案するとともに、本専門家・科学者会議においては沿岸漁業については協議する権限を与えられていない旨コメントしました。最終的に議論は平行線をたどり、この項に関しては空白のまま協力計画案を作成し、次の合同委員会（2002年3月日本にて開催予定）にて検討することになりました。

また、2001年度に計画されていたロシア200海里内でのさけ・ます幼魚調査がロシアからの入域許可証が発給されなかったことに遺憾の意を表明するとともに、このような事態になった事情について問い直し、善処を求めました。この入域不許可によりセンターが行う予定であったオホーツク海でのさけ・ます幼魚調査は計画を変更し、太平洋の日本200海里内での調査に切り替えて実施しました。このような状況が今後も続けば、両国間の協力、信頼関係にもひびが入りかねず、また、わが国のさけ・ます資源管理のための調査研究推進への影響が憂慮されます。

次期会合は2002年の秋に日本で開催される予定となっており、この会議で2003年及び2004年の協力計画案が作成される予定となっています。最終日には慣例に従い議事録に日口双方の団長がイニシャルを行い会議を終了しました。